

第4回：商品作物を作らない村

～ 「誰も、悪いことなんかしなかったわ。ただ一生懸命に、青い鳥を探しただけ……」 ～

いま、「地域」が直面している大きな問題の一つは、「自由化」という名のもとに大量生産や大量消費を推進する地球規模の経済システム(WTO)によって世界の隅々まで一元化されようとしていることである。地域の環境や資源に関わる問題としては、工業生産や食糧などの原材料である「資源」が「南」の農山漁村から都市へ、そして「北」の先進国へと運ばれ、農山漁村には「破壊された環境」が残される……。そうした世界規模での「物の移動」を是とする概念の対極にあるのが、「三里四方」で取れたものを食べるという、地域の物質循環を重視した考え方である。

また農業生産面では、これまで農業の近代化や経済的合理性のために、地域に根ざして行われていた伝統的な農業が、モノカルチャー的な商品作物栽培に転換させられてきている。こうした商品作物の栽培に伴って農業資材の投入がなされ、これは環境悪化につながるだけでなく、地域の自立や貧困の問題とも関係している。つまり、これまで地域の循環の中で自立的に農業をしてきた農民が、工業部門からの投入資材に頼らざるを得なくなり、自立性を失っていく。自立できない、従属関係に陥った状態は人々の「自主性」を奪うことになり、そのような状態はいかに物質的に恵まれていても、豊かであるとはいえない。さらに、地域における自然破壊が農業の持続性を失わせ、地域の人々の生活の存続そのものを脅かす……。

商品作物を作らない村がある。経済的や物質的な豊かさを求めて商品作物を導入したものの、それに伴って地力の低下、連作障害の発生、早魃などへの適応力の弱体化い等の原因で収量が極端に減ったり、国際競争にさらされて生産物の値段が低く抑えられたりと、必ずしも農民の収入向上には結びつかない。さらに利益追求するあまり、持続性や環境保全がないがしろにされ、開発のあとに荒廃した農地が残される。そういった反省の中から「売るための農業」はやめて、「生きるための農業」、自然の摂理を生かして地域内の循環の中で成り立つ農業をしようという動きが、タイやラオス等の農村で見られる。

それぞれの地域では、昔から受け継がれてきた固有の文化や知恵を生かして、それぞれの自然条件に適合する産物が生産されていた。こうした地域の特性を生かして、地域の人々が、地域の自然資源を地域のために保全し利用できる、地域循環型の資源管理を行い農村社会の内部の資源とエネルギーに依存しながら自立する、長期的かつ持続的な生活を営む。「商品作物を作らない村」ではこうした取り組みが実践的に行われている。昔の自給自足経済に戻ろう、というのではない。現在の状況にふさわしい新しい形態や生き方の模索が必要である。そして、これは決して途上国だけの話ではない。



Copyright : 小学館

「だから、景気がいいっていうのもちょっと違うんだよね。じゃあ、暮らしが困ってるかということとそうでもないんで……何て言うの、お金にはならないんだよね。でも、ちゃんと食ってはいけるわけさ。それが今までと違うところだよ。」

～ 村上龍・「希望の国のエクソダス」 ～